

蔵書点検の現況

千葉 文彦

はじめに

早稲田大学歴史館東伏見アーカイブズ⁽¹⁾（以下、東伏見アーカイブズ、と記す）は、早稲田大学歴史館（以下、歴史館、と記す）のアーカイブズ機能を担う施設として、早稲田大学と歴史館が定める各規則等⁽²⁾に従い、早稲田大学の歴史に係る「資料」を収集・整理・所蔵・公開し、調査・研究をおこなっている⁽³⁾。

東伏見アーカイブズが、東伏見キャンパス七九号館の収蔵庫内に所蔵する「資料」は、博物館や美術館が扱う「モノ」資料から、図書館が扱う「図書等」資料（以下、文脈に応じて、図書等資料、図書、または蔵書、と記す）、そして、文書館が扱う「文書」資料など広範囲にわたり、整理・登録済みのものだけで資料総数は約二〇万点に及ぶ。

本稿では、東伏見アーカイブズが所蔵する資料のうち、東伏見アーカイブズの図書担当⁽⁴⁾者が管理する図書等資料を

対象とした、蔵書点検の現況（二〇二三年一月時点）と、蔵書点検完了後の展開を述べる。

一 東伏見アーカイブズの図書等資料

東伏見アーカイブズの図書担当者が管理する図書等資料には、「等」と示している通り、図書だけでなく、雑誌、新聞、録音資料、映像資料、マイクロ資料、ポスター、チラシ、リーフレットなど、さまざまな資料が含まれる。これらの図書等資料に共通しているのは、「それ自体のものとしての価値より、そこに含まれる内容を利用することで生まれる価値を志向している」〔石川、ほか（二〇一二）⁽⁵⁾〕という点である。

しかしながら、ある特定の一冊の図書が、経年により入手困難になるなどして、唯一性・稀少性を持つ場合（持つようになった場合）、この図書は、そこに印刷された内容が閲覧される対象である「図書」であると同時に、歴史館の展示会で展示・鑑賞される「モノ」として扱われることとなり、このような「モノ」としての図書等資料も、図書担当者は管理している。⁽⁶⁾

これら図書担当者が管理する図書等資料は、東伏見アーカイブズが所蔵しアーカイブズ業務担当者が管理する「モノ」資料や「文書」資料と一緒に、博物館や美術館の所蔵物情報を管理することを目的に開発された「IB.MUSEUM」⁽⁷⁾というシステムを使用して目録を管理すると同時に、歴史館の業務に関わる歴史館メンバーが、所蔵資料を検索するために同システムを使用している。東伏見アーカイブズが所蔵する資料の内、一般公開している分については、早稲田大学図書館が運用する「WINE」⁽⁸⁾ではなく、「文化資源データベース」⁽⁹⁾というサービスによってウェブページで所蔵情報を公開している。

二 蔵書点検実施までの経緯

二〇二二年一〇月に筆者が図書担当に着任してすぐ、既に二〇二二年四月から図書業務を担当している図書担当者から、IBMUSEUMを利用した図書等資料の目録作成に問題が発生していることと、東伏見アーカイブズが移転と改組を経て、図書等資料が物理的な移動やデータ登録上の移動（転籍）をした経緯から、⁽¹⁰⁾ 図書等資料の管理にも問題が発生しているとの報告を受けた。

また、東伏見アーカイブズに所属する研究者からも、利用したい資料が見つからない、IBMUSEUMに登録されている目録情報・書誌情報に誤りがある、図書の現物が収蔵庫に排架（配架）されているにも関わらず、IBMUSEUMの検索でヒットしない、などの報告を複数受けた。これら報告の実態を確認するために、一般の図書館が所蔵物の有無や保存状態、そして、正しい排架やデータ登録がなされているかどうかを確認するために定期的な実施が必要とされている蔵書点検の実施記録を探したところ、図書等資料を対象とした蔵書点検が実施された記録を見つけることはできなかった。

過去に蔵書点検を実施しなかった（または、実施できなかった）（または、実施を試みたが開始できなかった・完了しなかった）（または、実施したが記録に残さなかった）理由の考察は本稿では扱わないが、過去の図書担当者が、その時々で環境下で誠意と責任をもって図書業務にあたっていたことは、残された引き継ぎ資料などから明らかである。これまでの図書担当者が積み重ねた功績に報い東伏見アーカイブズの図書等資料の管理と利用をより快適なものにするために、現在の図書担当者で、どのような原因でどのような問題が発生しているのかを把握することを目的に、二〇二二

年十一月の歴史館定例ミーティングでの提案と承認を経て、二〇二三年九月の完了を目指し、二〇二二年一二月に蔵書点検を開始した。

三 蔵書点検の現況

蔵書点検開始時は、新型コロナウイルス感染症の五類感染症移行前であったため、収蔵庫内での感染対策を徹底し、原則一名、または二名一組の少人数体制で点検をおこなった。

通常の図書館であれば、BIDと呼ばれるバーコードシールが蔵書に貼付されているため、BIDをバーコードリーダーで読み込むことで、素早く蔵書の有無をチェックすることができるとは、東伏見アーカイブズの図書等資料にはBIDを貼付していないこと、感染対策を徹底しながら少人数で一冊一冊、図書等資料の現物に記された請求記号や資料名、図書等資料の状態（破損・汚損）などを丁寧に目視し、書架を整理しながら、IBMUSEUMから抽出し作成した蔵書点検リストと照合し点検を進める必要があったため、点検には想定以上の時間がかかり、蔵書点検の完了目標を、当初の予定から半年延ばし、二〇二四年の三月末に変更することとした。

蔵書点検の開始から約一年が経過した二〇二三年一月までの間に、未登録や行方不明の図書等資料、IBMUSEUMの登録ミスが多くあるだけでなく、資料種別（図書、雑誌、マイクロ資料など）を区別するための目録情報¹¹が、IBMUSEUMに登録されていないケースがあることを把握することができた。

具体的には、本来「種数」で数えるべき雑誌が、それが雑誌だと分かるように登録がされておらず、同タイトルの一冊一冊の「雑誌」が一冊一冊の「図書」としてIBMUSEUMに登録されているケースが散見され（もちろん、一冊

の雑誌を一冊の単行図書扱いとすることはある）、資料種別ごとの冊数・種数・点数のカウントに影響をもたらしていることが判明した。

『日本の図書館 統計と名簿 2022』⁽²⁾には、二〇二二年四月一日を基準とした東伏見アーカイブズの蔵書数、雑誌種数、文献複写枚数など、約三〇項目のデータが収録されている。これらのデータは、日本図書館協会が毎年実施する「大学・短期大学・高等専門学校図書館調査」⁽³⁾に対して、東伏見アーカイブズの図書担当者等が回答したものが収録されている。筆者が東伏見アーカイブズの図書担当に着任する二〇二二年一〇月一日以前の調査に基づくこの『日本の図書館 統計と名簿 2022』には、東伏見アーカイブズの、蔵書冊数は「五万一、〇〇〇冊（うち洋書は五、〇〇〇冊）」、「雑誌種数は二九種（うち外国語は一四種）」と収録されている。⁽⁴⁾これらの収録データは、当時の図書担当者等によって根拠を持って回答されて収録されたものであり、筆者も二〇二三年度実施の各調査に対し前例の回答根拠に倣って回答をした。しかし今後、現在進めている蔵書点検で判明した、前述の資料種別が明確に登録されていないという問題を解消し、IBMUSEUMの登録を資料種別ごとにカウントができるよう修正した場合、各種統計調査でこれまで回答してきた蔵書数や雑誌種数などのデータが、大きく変わる可能性が高いことが判明した。

図書担当者は、蔵書点検により判明した未整理本の追加登録、行方不明本の欠本情報登録と搜索、そして、IBMUSEUMに登録された誤データの修正に加えて、二〇二四年度以降に実施される各種統計調査に対して、より正確な回答をするために、蔵書点検と同時進行で、図書等資料についての情報整理⁽⁵⁾をおこなうことを、二〇二三年四月に決定した。

四 図書等資料の情報の組織化

蔵書点検の途中経過を受けて、図書担当者は、日本の目録規則の標準である『日本目録規則（NCR）』と、日本の代表的な件名標目表である『基本件名標目表（BSH）』に準拠することによって、図書等資料の情報の整理（情報の組織化）をし、目録の編成をする方針を固めた。¹⁸⁾

NCRとBSHに従い、正確かつ規則性のある主題（図書における主要な内容）を含む書誌の事項を記述し目録編成をおこなうことで、各種統計調査への回答をより正確なものにするだけでなく、歴史館がおこなう大学史編纂に関わる研究者や展示会を担当する学芸員や教職員などの歴史館メンバーが、IBMUSEUMでの検索や収蔵庫内で、目的に叶う図書等資料に辿り着く精度が上がるのが期待できる。

現状は、IBMUSEUMの目録情報は、NCRやBSHに従い登録がなされていないために統一性と正確さを欠き、探している特定の資料を検索（既知資料検索）しても見つからないケースがあり、さらに、BSHなどに基づいて編成された主題情報がIBMUSEUMに登録されていないために、たとえば、「入学試験」についての何らかの資料を検索（未知資料検索）しても、「入学試験」という主題情報の登録が無いために、タイトル（資料名）に「入学試験」の文字が含まれていない限り、たとえ「入学試験」に関する内容の図書等資料だとしても検索結果には上がらないため、満足のいく質と量の検索結果を得られないケースがあると考えられる。

図書担当者は、今後、蔵書点検と並行して、NCRとBSHに基づいた目録編成を進めることにより、図書等資料の組織化を進め情報を整理し、各種統計調査への正確な回答と、図書等資料を見つけやすくなるための作業を進める。

五 蔵書点検と図書等資料の情報の組織化後の展開

ここまで述べた、蔵書点検の実施と図書等資料の情報の組織化は、通常の図書館では既におこなわれていることであり、達成に時間は要するものの、難易度が高いわけでない。東伏見アーカイブズの図書担当者が目指すのは、その後の展開である。

具体的には、図書担当者が、早稲田大学の歴史に係る主題の専門知識を身に付け、図書等資料コレクションの形成をおこなう中心的存在となることを目指している。現在、東伏見アーカイブズでは、歴史館メンバーから購入希望があつた場合にのみ、図書等資料を購入している⁽¹⁹⁾（寄贈などの購入外図書等資料の収集については本稿では省略する）。

形式上、歴史館が定める「資料収集業務に関する内規」に従い図書等資料を購入しているものの、実態は、歴史館メンバーの購入希望があつた場合にのみ購入し、図書担当者自身が選書をおこなうことはなく、収集計画に基づいた購入はおこなわれていない。石川、ほか⁽²⁰⁾が東京大学附属図書館の例で指摘する通り「教員は研究の必要に応じて資料を購入するが当然のことながら統一的な方針に基づいていないわけではないので、きわめて偏った蔵書になっている可能性が高い」という状況は、東伏見アーカイブズにも当てはまると筆者は考える。

言うまでもなく、蔵書コレクションが、歴史館の大学史編纂と展示会業務等に与える影響は大きい。収集された蔵書に偏りがあれば、客観的かつ多視点に耐えうる大学史の編纂は叶わないし、展示会についても、展示候補となる蔵書に偏りがある場合やその数が乏しい場合、展示テーマの選択肢が限られ、学芸員や教職員が描いた展示空間を思うように作り出すことができないとも考えられる。

よって、東伏見アーカイブズの図書担当者は、歴史館の大学史編纂と展示会等の可能性を広げるために、主題専門知識を基に、蔵書コレクションの形成、言い換えれば、図書等資料を対象としたキュレーション^②をおこない、図書等資料と歴史館メンバーの間の媒介する役割を担うことを目指している。

東伏見アーカイブズの図書担当者による蔵書コレクションの形成と蔵書の排架（配列デザイン）が、歴史館メンバーが目的に叶った図書等資料に辿り着く助けになることと、IBNMUSEUMでの検索や収蔵庫内でのブラウジングにより、思いがけない図書等資料の発見をするセレンディティの発揮を促す源になることを筆者は期待する。

ちば・ふみひこ（早稲田大学歴史館嘱託職員）

註

（１）早稲田大学歴史館は、早稲田キャンパス一号館一階（展示施設）と、東伏見キャンパス七九号館五階（アーカイブズ施設）の二箇所に分かれている。

（２）歴史館では、早稲田大学の「個人情報保護に関する規則」に準拠し、「資料収集業務に関する内規」「資料利用内規」、そして、「資料利用内規」に基づいた「複写サービスに関する細則」「資料等の複写物の利用に関する細則」を定めており、これらは東伏見アーカイブズのウェブページ（<https://www.waseda.jp/culture/archives/services/>）で確認できる（二〇一三年十一月時点）。

（３）歴史館規則（一九九八年五月二二日規約第九八―六号）。全文は「歴史館彙報」「早稲田大学史記要」五十四巻（二〇一三年三月）参照。

（４）二〇一三年十一月時点で、東伏見アーカイブズでは、専門嘱託（常勤）一名と派遣社員（週三日勤務）二名、学生スタッフ一名（週一日勤務）の計四名が、図書業務にあたっている。図書担当者のほか、アーカイブズ業務担当者が「モノ」資料や「文書」資料の管理業務にあたっている。

（５）石川徹也、ほか（編）。『つながる 図書館・博物館・文書館―デジタル化時代の知の基盤づくりへ』（二〇一、東京大学出版会）、一三頁。同著では、博物館や文書館が

扱う資料との比較で、図書館が扱う資料についての解釈が示されており、本稿でも同著の解釈に従う。

- (6) 図書担当者は、閲覧に耐えることができないと判断される図書等資料を、保存を優先するために、アーカイブズ業務担当者による保存と管理を引き渡す場合がある。

- (7) 東伏見アーカイブズの「資料」は、整理済みの分については、早稲田システム開発株式会社製の「IB.MUSEUM (アイビーミュージム) v11」というシステム (ソフト) に登録し管理している。IB は Image Based の略。

- (8) WINE (Waseda University Information Network System の略)。早稲田大学図書館の所蔵物を調べることができる。東伏見アーカイブズの資料は収録されていない。

- (9) 文化資源データベースは、坪内博士記念演劇博物館・會津八一記念博物館・歴史館・国際文学館など、早稲田大学の文化施設にある所蔵物を横断検索することができるサービス。

- (10) 歴史館の改組・移転の経緯は、袴田郁一「歴史館 (改組)」『早稲田大学史記要』第五四巻 (二〇一三年三月、早稲田大学歴史館)、大日方純夫「大学史資料センターの二〇年」『早稲田大学史記要』第五二巻 (二〇一二年三月、早稲田大学歴史館)、大日方純夫「大学史資料センターの存在意義と東伏見移転」『早稲田大学史記要』第四五巻 (二〇一四年三月、早稲田大学歴史館) を見よ。

- (11) 二〇一三年十一月時点で、蔵書冊数「五万一、〇〇〇冊

(点)」「(冊)」で示す蔵書冊数は、前掲『日本の図書館統計と名簿 2022』に収録・公開されている蔵書冊数)の内、「九、二二三冊(点)」の蔵書点検を終え、「一、二七七件」の要修正箇所があることが判明した。修正の内容は、IB.MUSEUM への登録漏れ、登録情報の誤り (請求記号の付与誤りを含む)、誤字脱字、資料種別登録ミスなど、多岐にわたる。

- (12) 日本図書館協会図書館調査事業委員会日本の図書館調査委員会編『日本の図書館―統計と名簿 2022』(二〇一三年、日本図書館協会)。日本図書館協会の正式名称は「公益社団法人日本図書館協会」

- (13) 『日本の図書館 統計と名簿 2022』では「歴史館 (東伏見アーカイブズ)」と表記されている。

- (14) 東伏見アーカイブズは、日本図書館協会が毎年実施する「大学・短期大学・高等専門学校図書館調査」の対象となっている。なお、東伏見アーカイブズは、日本図書館協会の上記調査に加えて、「文化推進部年報」発行のための調査 (早稲田大学文化推進部)、「学術情報基盤実態調査《大学図書館編》」(文部科学省)、「資産図書の購入・除籍報告」のための調査 (早稲田大学経理部) の調査対象施設である。

- (15) ここに収録されている蔵書冊数に製本雑誌を含むが、視聴覚資料、電子図書などの電子資料は含まない。

- (16) 前掲、『日本の図書館 統計と名簿 2022』、二九〇～

二九一頁。

- (17) 図書等資料の資料を見つけやすく管理するための情報整理のことを、本稿では「図書等資料の情報の組織化」と呼ぶこととする。

- (18) 東伏見アーカイブズでは、他館との共同での目録作成作業（共同目録作業）を予定していないため（二〇二三年一月現在）、海外でのデファクトスタンダードとされ、早稲田大学図書館と慶應義塾大学メディアセンターによる図書館業務共同化プロジェクトで採用されたMARC21の採用は予定していない。

- (19) 図書等資料の購入希望があった場合、図書担当者は、同じものが既に所蔵されていないかIBNMUSEUMで重複チェックをおこない、重複が無く三万円未満であればすぐに購入している。三万円以上であれば、「図書ワーキング」という東伏見アーカイブズ内の実務担当者で構成される図書業務に関する事項を打ち合わせる場で購入の可否を判断し、「図書ワーキング」にて購入判断ができなかった場合は、歴史館館長・副館長と実務担当者等で構成される「資料選定会議」の場で購入可否の判断をしている。

- (20) 前掲、『つながる 図書館・博物館・文書館―デジタル化時代の知の基盤づくりへ』、六二頁。

- (21) 歴史館で展示会を担当する学芸員は、自らをキュレーターとは名乗っていない。よって、歴史館では現時点でキュレーションという言葉・概念は用いていない。本稿では、

キュレーションという言葉を、図書担当者が主題専門知識に基づき、図書等資料の情報の収集・整理・体系化をおこない、その結果をIBNMUSEUM内の目録編成と収蔵庫内の排架（配列デザイン）に表現するという意味で用いる。